The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学史紀要 第1号 大阪大学五十年史編集だより(部局史)
Author(s)	
Citation	大阪大学史紀要. 1981, 1, p. 124-137
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/21741
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

写真集の編集よもやま

堀川　明（工学部）
水野　克彦（教養部）

大阪大学五十年史編集実行委員会の中に写真集編集のための小委員会が設けられたのは昭和五十四年五月、委員長は工学部の三谷裕康教授であった。昭和五十五年四月三谷教授が停年退官された後、堀川が委員長となった。

写真集は他の記念出版物（通史、部局史）より早く、五十六年三月末日に出版を予定されており、五十六年五月の記念式典には是非間に合わすようにとの至上命令である。

写真の収集

写真資料収集の実際の作業は五十五年一月から活発化していった。一般に歴史的な内容の写真集では、その古い時代の一年分ごとに準備に一ヵ月、五十年分ならば五十ヵ月かければ良いものができるといわれている。ほんとにその通りだと思う。今回はその半分の期間しかないが時間がないという理由で出版を延期することもできない。何とか形を付けなければならない。ただ幸いなことに、何周年記念という事業が行なわれていた部局もあり、これらの資料の中に使用できるものが数多くあったのが大いに幸いした。資料の収集では協力的な部局とそうでない部局の差が感じられた。結局七月頃には約一〇〇〇枚ぐらい集まっていた。この頃から割付け作業が開始された。割付け作業は多人数でわいわい言いながらやれるものではない。結局、堀川と紙野、明山の両専門委員と補佐員一名とで写真の選定と基本割付けを、時には各部局委員の応援を仰ぎながら行なうこととし、この作業と平行しながら不足の写真を出来る限り収集することにした。

編集の基本方針

編集にあたり、事柄を一元的に配置することは困難なので、時間をたて方向に、学部、地区、事柄などをよこ方向に扱った二元配置を基本とした。まず時間的には、いわゆる前史と称される部分について、医・工・理・大高・浪高の順で配置し、つぎに大阪帝国大学時代を医・理・工の順で割付けた。さらに大阪大学時代に入ると、学部の増設、地区の充実など総合大学としての体裁が飛躍的に整えられるのであるが、この時代では、内容を①建物関係、地区の整備、②学生生活、③社会とのかかわり、④研究活動、⑤その他と大別し、それら各内容の中で、相互の関連と、ある程度の時代順とを考えながら割付けて行くことにした。

写真の選定と割付け

集められた写真は結局二一〇〇枚を越すほどになったが、写真集そのものの量にも限界があり、当初仕上り頁数を一六六頁としていたが、結局一八八頁にも増え、掲載される写真の数は七〇〇枚に達した。

とにかく古い資料写真を探し出し、かき集め、それを編集・割付けするのは、新しく一から自分で企画するのとは大違いで、受動的に集められた、しかも事柄や、年代がバラバラのものを構成するのはかなり面倒な仕事である。とにかく具体的な作業にかからなければならないし、走りながら考えなければ締切日までに間に合わない状態であった。

選定・割付け作業は前述のように委員三名と補佐員一名とでスタートした。八月中には割付け終了の予定であったが、とてもそうは行かなかった。一日あたり一〇頁分がやっとで、主に立ったままの作業であるため一日作業すると、疲労が大きく、長続きできないと判断した。したがって殆んどは半日作業に切替えた。半日で三～五頁分がやっとである。このスピードは、一頁八〇〇字ぐらいの本の原稿を執筆するのとほぼ同じである。割付け作業は人が多ければ早くできるものではない。割付けのフィロソフィを一貫させるため

には結局小人数でやるより仕方がない。作業は結局十一月末日まで要したが、この労力と時間とは、写真集とほぼ同程度の頁数の単行本の原稿執筆と変わらなかった。単行本の場合は自分一人が考えていることを書けばいいが、写真集の場合には、与えられた資料に依って、皆様の気に入るようなものに割付けなければならないという点で大変な仕事である。

しかし幸い周囲の温い応援、とくに写真集小委員会のメンバーの協力により、一応写真の選定と割付けの第一次案を終了することができた。

写真集の体裁

あとは、割付け案の詰めが行なわれることと写真集の表紙、紙質、デザイン、扉、序文、目次、口絵、写真、略年表、略史、写真提供者リスト、奥付などがうまく配置され、写真の仕上がりについて注意することなど、半ば事務的な仕事が残されるのみである。

あと数ヵ月、約束の期限まで頑張らなければと思っている。

部局史編集雑感

文学部

岸畑　豊

文学部の「五十年史」の編集にあたって、重要な資料の一つは『大阪大学二十五年誌』であるが、一九四八（昭和二十三）年に法文学部として発足した本学部にとって『二十五年誌』は設置と分離独立の記述が主であり、それ以後の二十五年間こそ文学部の拡充と発展の時代であった。そこで部門編集実行委員会は『五十年史』の総記を大幅に増量して、全体の三分の一を当て、残りを各学科に割り当てることにした。なお総記に一貫性をもたせるために、共同執筆方式をとらず、委員会が部局の事情にくわしい一名の教授を教授会に推薦して、執筆を依頼した。

総記その他の資料をうるため、一九七九年秋、当時の文学部長岡部教授の発案により、名誉教授を囲む教授会メンバーの懇談会が開催され、委員会で予め用意された諸事項、たとえば『二十五年誌』の記述内容、それ以後の期間における重要な事項などが次々に話題とされ、名誉教授の思い出話などが語られて、これらはすべて録音され、保存されている。この催しは資料収集のためばかりでなく、教授会メンバーが学部の歴史を知る機会ともなり、きわめて有意義であった。総記執筆者の原稿は二度にわたって委員会によって検討され、その都度書き改められて完成した。この原稿では執筆者の記述の原則が貫ぬかれていて、期待されたとおりのものとなった。

各学科、講座の執筆には、「五十年史編集大綱」の執筆要領のほか、若干の点で統一をはかったものの、それ以外の点は各講座に一任された。集まった原稿をみると、学科ごとに記述は大体統一されており、学科間にややちがいがあるが、むしろそれぞれの個性がにじみ出ていて興味深い。

職務繁忙の間、半年という期間内での編集は、当初予想されたほど簡単なものではなく、予期せぬ問題に悩まされたが、幸い委員会の方針に対する全学部、および人間科学部の協力をえて、ほぼ編集を終えることができた。あらためて各方面に深甚の謝意を表したいとおもう。

経済学部

内海洋一

どの学部、どの部局でもそうだと思いますが、学部の複雑な歴史を限られた紙数の中におさめることには苦労がありました。医学部のような長い歴史

を持つところに較べると経済学部などは贅沢はいえないわけですが、それなりに頭を悩ますことが少なくありませんでした。また、各講座に、古くできたものや新しくできたものがあり、人の出入りの頻繁だったものやそうでないものもあり、同じ枚数を割当てると繁閑様々になり、これにも困りました。

経済学部は、戦後創設されました。創設に当たって今村総長が高田保馬先生を中心に陣容をととのえて行こうとされたようです。このことは、『高田保馬博士の生涯と学説』（創文社、昭和五十六年刊）における安井琢磨先生のエッセイを見ても明らかです。ところが、高田先生が教職追放中だったため、正式の記録にこのことが記されていないのです。表に出た記録にはごく形式的なことしか載っていません。こういう点をどう扱ってよいかということには、苦慮致しました。

どこの部局もそうだと思いますが、総じて、人事問題については、有りのままに書きにくいことが少なからずありました。どうも、こういう歴史はきれいごとをのみ記すことになるもののようです。どろどろした人間関係の中に正に人間らしい面白味もあるのですが——。

最後に写真のことに触れておきますが、私自身もそうですが、人は写真を撮るときにどうしても人物を中心にする傾向が強いようです。建物や道路などの写真は案外に撮りません。そのため、町や村や会社の歴史などでも、そうしたものの写真の不足には苦労しているようです。学校の写真についても全く同じことがいえます。古い街並や建物がどんどん毀されて行く時代ですから、もっとこうしたものの写真を撮っておくべきだと思います。後世の人にきっと喜ばれるでしょう。

法学部

山中永之佑

法学部史の編集の担当者として与えられた仕事は、執筆していただいた各講座・施設等の沿革史の調整と「総記」を執筆することであった。

各講座・施設等の沿革史については、それぞれ担当の教官、事務職員の方々が、熱心かつ誠実に執筆して下さり、ほぼ期限どおりに私の手元まで原稿を提出して下さったおかげで、調整作業は比較的スムーズにすすんだ。講座の沿革史は、予めモデルを示してほしいという御要望もあって、西洋法制史講座の沿革史を執筆者の方々に、お渡ししたが、それでも、執筆者各位の熱意によって各講座独特の個性のあらわれた講座史ができ上った。

講座史や施設の沿革等を執筆していただいている過程で、執筆者の方々から御苦労話もお聞きしたが、やはり、記念事業として、このような沿革史を作成しておくことは、大へんよいことであるとの御意見も聞くことができたことは、担当者として実に嬉しいかぎりであった。

講座史や施設の沿革等の編集が比較的スムーズにすすんだのに対して、困ったのは法学部史「総記」の執筆である。その理由は、利用に値する資料が極度に少ないことであった。とくに法文学部創設時の資料が皆無であった。庶務係長の轟木昇氏を通じて、本部所蔵の資料を借用してみたが、そこにもなく、本学部出身の文部省大学課長斉藤諦淳氏を通じて大学課所蔵の文書も調べていただいたが、「残念ながらそのような書類は所蔵されていない」との返事であった。

丁度、送られてきた『北海道大学百年史』のうちの「法学部史」が、「法文学部設立趣意書」を登載して、法文学部創設当初の事情をかなり詳しく説明しているのをみるにつけ、資料不足が悔まれてならなかった。締切期限も迫っている事情もあって、これまでの『大阪大学二十五年誌』や『大阪大学一覧』などの二次資料を参考にしながら、何とか「総記」の執筆を終えた。法文学部創設当時の事情については、まさにデッチ上げたという感をぬぐいきれない。

しかし、本部から借用した「設置申請書」などによって、法学部の創設時には、法律学科、政治学科の二学科の設置が考えられ、定員も各一二〇名ずつ、計二四〇名の予定であったことなどが判明したことは、収獲であった。

このたびの五十年史の編さんを契機に設置された「大阪大学五十年史資料・編集室」が、五十年史の編さんを終えたのちも、存続して、大阪大学史のための資料調査や研究がすすめられる予定とのことを仄聞する。大学史研究の重要性が叫ばれている今日、まことに時宜をえた措置といえよう。今後、この編さん室が中心となって、法学部史のみならず、大阪大学史の研究がいっそう充実、進化されることを切に期待する次第である。

最後に今回の法学部史の編集にあたり執筆、協力いただいた教官、事務職員の方々、また法文学部創設当時の資料を調査して下さった文部省斉藤大学課長はじめ職員の方々に深謝の意を表して、拙い感想文を閉じたい。

薬学部

三浦喜温

医学部薬学科として出発してから三十余年、その中で大阪大学統合計画に従って、旧来の豊中市刀根山丘陵から吹田市千里丘陵へ移転したことは薬学部にとって大きな変換の節目であった。出発後二十五年を経て、昭和五十年に市街地から、郊外の万国博跡地の特有の雰囲気の中へ、新しい土地、容れ物へと移転したことは気も溌溂とし、多くの点で変化せざるを得なかった。それだけに薬学部の構成員の日々の歩みの姿勢も少しずつ変化を見せてきたが、常に学部設立の伝統と継承を求めて新たなる歴史を作っている。

薬学部は二学科一施設の小さく、歴史の新しい学部の性格は否めないが、それでも、学科の増設を始めとするエポック、人員の移動は大波、小波となって絶ゆることなく続いている。この間の記録は『大阪大学二十五年誌』、『薬学部二十五年誌』等にも記されてきたが、本格的に歴史へ目を向けたのはこの五十年史に始まる。学部三十年の歴史では依然として現況の報告に留まらざるを得ない点も多いが、日々の歩みは今後も学部を構成する人々の手により、種々の色相をもった年輪として拡がり、積み重ねられることを期待している。

種々な困難の山積する中で、多くの卒業生を始め、学部の構成員各位の大いなる援助、協力のもと、部局史の編集を終えることができたことに深く感謝している。

基礎工学部

藤田英一

むかし、海軍で平泉学派の皇国史観を聴かされ、戦後は極端な左翼系の歴史の流行を見聞し、いまはまた文学・マスコミの歴史物の氾濫に身をさらされている、そんな中で、大阪大学五十年史を編む仕事に多少とも参加せざるを得ないとは、真につらい難しい話だと思いました。その上、実際に部局史を作る段階では現実的な困難が加わって、作業はなかなか渉らず、余り楽しい仕事とは申せませんでした。

五十年と言えば、半世紀ですから、史とよんでもやや体を為すこともありましょうが、基礎工学部は設置の頃から四半世紀にも満たないので、伝統の重みがおのずから行間ににじみでるなどと言う処は、到底望むべくもありません。しかし、それかと言って、官庁の記録や科学の辞典のような事実の年代的羅列に終始したくはないし、トインビーの言うような歴史観の確立など大それた事は考えられないにしても、せめて基礎工学部の存在と継続の意義が浮彫りにされ、設立当時の思想とその流れが読む人に伝わるようにはしたいものだと思いました。

そのために、編集方針として、できるだけ規制の少ない、雛型などのない、各人の独創的な自由な発想で書く形とし、学部の簡単な執筆要項以外には配布しませんでした。この方が無味乾燥な人名や論文名の羅列でないそれぞれの特色と流れの出た記述となり、全体を纏めて見れば、学部の存在理由と動きが感知されるだろうと期待したからです。幸いにして、桜井良文教授の助言を頂き、総記には藤沢和男教授他、写真記録には畑田耕一助教授他の有能な方々の貢献があって、いわゆる公文書的でない特色ある部局史ができたのではないかと思います。しかし、反面、厳正な統一を欠くのは二律背反で致し方なく、これから目立つ不揃いを刈り整えて内容も体裁もより優れたものにして、刊行までに漕ぎつけたいと思っています。名誉教授方の助言、規定頁数や期日の遵守、編集委員会のスムーズさなど、学部の纏まりの良さも改めて痛感した次第です。

教養部

西山敏之

五十年史教養部編集委員会は、一昨年、編集委員長であった国史学の井上名誉教授と、水野・吉川・播本各教授と私の五名で発足した。教養部には退職された教官の集まりである待兼会というのがあるが、一昨年末にこの会から数名の先生方を招いて教養部創設当時の話などを伺った。その後井上教授が退職されたので、委員会を充実させるために東洋史の布目教授、ついで越田・斉藤(謹)両教授を委員に迎えて作業を進めることとなった。まず教養部にある二十四学科の学科目分担者を選出し、これに言語学系の代表を加えて、昨年五月末までに、(A)教官の異動、(B)教官の写真、(C)研究室の変遷、(D)教育設備の変遷と現況、(E)教育内容の変遷、(F)その他特記すべきことの六項目について各学科から資料を寄せて頂くこととなり収集を完了した。また七月末までには、各学科目に各論の原稿を書いて頂くこととし、井上前委員長に見本を作成して頂いた。各論は全部局史の約⅔を占めることになるが、この部分は各学科目分担者の方は勿論、執筆された各教官の努力の賜である。総記は布目教授と新しく委員になられた長山教授にお願いすることになり、執筆のための素原稿として、水野・越田・吉川・斉藤（謹）各教授に、それぞれ、創設期から教養部誕生までの経緯、教務関係の記録、施設関係の記録、および学生関係の記事をお願いした。

教養部は各学部に共通する一般教養に関する教育を行なうという新制大学に特有の部局であり、教養部の歴史は、新制大学としての阪大発足の歴史ということもできよう。大学紛争を経て、評議会にもいくつかの改革案が答申されたが、改革の一環として言語文化部の創設があり、また近く健康体育部も生まれようとしている。今後とも上記答申の精神は長く生かされて行かねばならないであろう。しかし顧みると教養部の抱える問題は余りにも多く、部局史にそのすべてを盛り尽すことはできなかったが、各委員の方々は勿論、資料の収集や執筆に参加して頂いた多数の教官、元教官の御協力により、部局史がまとまる段階に到達できたことを感謝している。

産業科学研究所

原田篤也

昭和十四年に産業科学研究所が発足し、昭和五十四年で四十年になり、これを記念して講演会、祝賀会、さらに産研四十年のあゆみと題しての座談会を昭和五十四年十一月三十日に開いた。この座談会には産研の歴代の所長、創立当時の教授、現所長、産研協会専務理事の方々九名が出席し、湯川泰秀元所長の司会の下に、産研設立当初の全体構想と社会的背景、音響科学研究所の推移、放射線実験所の設置、現在の四研究部制への移行、産研吹田移転

のいきさつなどを中心に年代を追って約二時間お話していただいた。この座談会の速記は大学の五十年史編集室の大西さんにとっていただくと共に記録をテープにとった。種々昔を偲ぶ興味ある資料が得られ、その骨子を部局史執筆に参考にさせることができた。座談会出席の方々にここで深く感謝申し上げます。産研総記中の創設のところの記事は産業科学研究協会の編集発行（昭和五十一年）の「伊藤忠兵衛翁を偲んで」の冊子中の忠兵衛翁と大阪大学産業科学研究所及び財団法人産業科学研究協会項目のところの研究所と協会の経過と現状を特に参考にさせていただいた。

産研の項目の執筆に当たっては、まず各項目を部門担当教授、施設長などの方々に執筆していただき、これらの原稿がほぼ出来た時点で、各研究部のまとめを各研究部の執筆担当教授の方々に書いていただき、さらにこれらが完成に近づくにしたがい、三名の編集幹事（松尾、清水、原田各教授）がこれらを充分に検討し、産研の総記の記事を事務部と連絡しながらまとめた。幹事として苦労した点は三十九年に四研究部制が出来るまでの期間、産研の各部門がどのように変遷してきたかであって、部門どうしの関連がかなり複雑であることに気がついた。部門変遷にかなり融通性をもたせていたことが産研の特徴になっていたようで、部局史の執筆に当たって、産研の歴史をあらためて知ることができた。

社会経済研究所

新開陽一

当研究所は、歴史が新しい、所員の数がすくない、現所員の大多数は就任後あまり年月がすぎていないなど、他の部局とはかなり違った特徴をもっている。部局史の編集のうえでも、楽な面と困る面とがあったので、その間の事情を略記しておこう。

所員数がごくすくなく（研究に従事する教官は現在六名）、所員歴の新しい人ばかりなので、歴史には関心が浅いのは当然である。部局史の編集にさいして、異論がでにくく、意思の統一や材料の取捨で長く議論をする必要がなかったのは、大いに時間の節約になった。研究所が創設されるまでの経済学部附属施設であった時代については、すでに詳しい叙述が残されていたので、それに依拠することができたのも幸いであった。

他方、従来とも所員の関心が前向きであったため、資料の類いがほとんど保存されていないので、部局史の名に値するほどの歴史的叙述をおこなうのは困難であった。いきおい現在の研究内容の紹介にスペースを割く結果になってしまったが、これも遠い将来の立場からみれば一つの歴史であるには違いない。写真がないのにも困った。研究会などは年中行なっているのに一枚も写真をとってなく、仕方なしにごく最近の研究会風景を撮影した次第である。

レーザー核融合研究センター

山中千代衛

レーザー核融合研究センターは大学部局の分類からすると学内共同利用教育研究施設に属している。実際、設立に際し文部当局も大分、頭をひねった模様である。本来の趣旨からすると歴とした研究所であって、施設を共同研究に提供し、全学的な利用に供するいわゆるセンターではない。独自の研究テーマを自主的に推進する使命を持っている。現在七部門構成で、教授、助教授十四名の定員がある。管理部門として事務部も機能している。当然設立に際し法をふまえ、条文を起こすべきであったが、いろいろ学外での横ならびの事情から便宜措置で発足してしまったのである。通則上運営委員会を設置しているが、これも部外者の共同利用に備え機能するためではなく、むし

ろセンターに対し学術的な支援体制を組織することを目的としている。

エネルギー開発はわが国に課せられた科学技術研究における大きな使命である。その中でも核融合研究の重要性は言を俟たない。しかしこの研究は長期におけるきわめて困難な創造的努力を必要としている。このため多方面にわたる優秀な専門家の参加が不可欠とされている。また見方を変えれば、あたかもアポロ計画が科学技術の発展にすばらしい波及効果を及ぼしたのと同様、核融合開発研究は科学・技術全般に広く、多様なインパクトを与えるべきものと期待される。

レーザー核融合研究センターの部局史を編集するに当たってホコリ高きセンター所員の声を聞いてみると大きな使命を荷っているにもかかわらず、センターは大学内の一部局としての地位が確立していないという意見がある。言う所はセンターの教授が大学の運営にコミットせず大学構成員としてオートノミーへの権限が与えられていないという話である。

ちなみに略同列の京都大学ヘリオトロン核融合研究センターでは四、五年も前からこのような大学制度上の問題は解決ずみなのである。百年の歴史による重厚な京大とやっと創立五十年を迎えるヤング阪大とイメージがどこかで逆転しているようにみえる。

蛋白質研究所

泉　美　治

歴史ともなれば形式的になり、すべてはきれいごとになり勝ちである。ここに少し汚れたことを書いておくことにする。塩見時代は梅雨ともなれば、毎朝水溜りの中を地階の入口から入って水をかい出すのが日課であったことや、西区（土佐堀通り三丁目二二）の時代には前に杉村倉庫のアンチャンが、床下にはルンペンが寝起きしている中での生活であった。現在の研究所から考えると想像も出来ないことである。反面建物が小さかったので、研究所員全員がいつも顔を会わせているので、事務も研究室も一つの家族のようで、それだけお互いの専門知識を分ち合うのに役立ったように思う。常安町の新館は大阪市からの借地の上に建てたもので、国立大学の中で初めての冷暖房設備のされた建物であったと記憶している。大学紛争では本部に隣接する至近の建物としてゲバが迷い込んだり、玄関の前で全学集会が開かれたり、他学部と一味異なった経験を残している。いずれ常安町の建物も無くなるであろうが、われわれには記念すべき建物であり、研究所成長の記念塔でもある。現在の建物の立地について吹田移転に先立って議論があり、一時は現在の本部の場所にしようかという考えも支配した。しかし送電線等の事情もあり、当初から予定されていた現在地に建てられることになった。今にして思えば現在地は私達にとって最適地であったのではなかろうか。部局史では事務系のことについて記載することが許されなかったが、研究所設置概算要求のため、当時、理学部経理係長大谷友正が赤堀四郎著『アミノ酸及び蛋白質』を読破したり、既に他界した横山秀三郎が白せん粉の菓子で部門間の関係を示すモザイクのピラミッドを作って本省に出掛けたり、十二年にわたって事務長を続け本研究所の基盤を固めた筒井美治等々の陰の力をここに書き留めておくことにする。

溶接工学研究所

松　田　福　久

溶接工学研究所は昭和四十七年に創設された九年目のまだ若い研究所である。このため、今回の五十年史を執筆するにあたり、第一節の一般的な歴史事項を述べる総記については、他の研究所などに比してその調査や資料調べで苦労は少なかったものと思う。また現役の先生で創設以前より現在に至る

までを経験されている方が多く居られるので、事務的記録の不明な点は直接御本人に確かめることもできた。

また研究所の創設以前の記録については工学部溶接工学科創設三十年誌に述べられており、これは貴重な資料となった。これをまとめられた同委員会に敬意を表するとともにこのような資料はのちのち極めて役立つものであることを痛感した。

さらに溶接工学研究所は昭和五十年十月末に十周年記念の式典と記念の国際会議を挙行した。五十年史にこれらの行事を組み入れることができたのは幸であった。

さらに第二節の研究活動については、基本的には各部門の独自性のある執筆をお願いした。このため部門によってはかならずしも統一されたものとはならなかったが、一般の研究活動の外に、研究活動の直接的な役割を果たしている若い助手の人達の名前もできるだけ挙げるようにした。これは現在の研究活動がどのような人達によって遂行されているかを後世に記録しておきたかったためである。さらにまた、現在の若い研究者も次にくる阪大七十五年史（？）の出版時代には立派な指導者となっているはずである。これらの人達が五十年史に自分の名前を見出したとき、懐かしさと同時にその頃の研究に対する考え方や態度を想い出し、指導者としての一つの反省の機会にでもなってもらえれば筆者の望外の栄誉である。

最後に第一節の原稿作成に多大の御尽力を頂いた岡本郁男教授と第二節に御執筆頂いた各部門の各位に記して謝意を表したい。

工作センター

光永専一

阪大五十年史の中で、工作センター十五年の歴史は長くはない。しかし工作センターは古くからあった理学部の工作室および、基礎工学部の工作室が併合されて作られた全学共同利用施設の一つであり、工作の技能、技術の貢献という点では阪大発展の歴史にもつながりがあると思う。

一　編集の仕事をする過程で、年代別の各工作室の動きを振返って見ると、時代の流れ、人の動きに伴い、業務実績や、その内容が様々に進展していることが判る。古い工作施設の更新が計画的に行なわれたことは、非常によかったと思う。硝子工作室では「中之島」時代、夏期の酷暑時にも扇風機は足もとしか使えず、塩をなめて体力を保ちつつ、仕事をしたそうだが、豊中に移った翌年からクーラーが設置され、作業環境は非常に改善された。硝子工作、機械工作には永年にわたり、研究室の要請に応えて、千差万別の一品料理的な試作に取り組んで、研究室から感謝状を戴いたり、卓抜した技能者として、労働大臣表彰や府知事表彰を受けた技官も数名居る。また当工作センターの特色であるスチューデントショップ（公開工作室）では毎年何回か行なっている学生実習と技術講習会で学生や研究者が技術指導をうけて、自ら工作機械を使って試作することが定着している。

二　資料収集について

創設当時の構想は、当時の運営委員会の記録や委員のメモに寄ったものである。昭和三十九年春の朝日新聞に載った堀江教授の記事は発足当時の推移を物語っている。昭和四十一年五月の「阪大いちょう祭」に工作センターが初めて公開された時の写真や（このとき正田名誉教授が来訪された）、その後の技術講習会や安全講習会の記録写真とか、学内行事のリクリエーション（野球大会や旅行）の際に撮ったものも、当時の若い元気な姿が映っていて懐かしい思い出であるが発表できないのは残念であった。業務実績と仕事の内容に関しては昭和四十三年（一九六八）に創刊された工作センター・ニュース Vol. 1 から毎年の製品紹介や設備紹介に詳しく説明されており、当時の業務日誌から苦心談を探し出したものも多い。

核物理研究センター

細野和彦

「大阪大学五十年史」の中の部局史の執筆編集の後記として、一言申し述べます。

核物理研究センターも創設十周年を迎えようとしています。その意味でも、本研究センターの創設史及び創設後の歴史をまとめておく良い機会でありました。部局史を執筆編集するに当たり、出来る限り資料収集に努め、忠実に記述したつもりですが、執筆者を含め本研究センターの教官の多くが経験した時代のことであり、種々思い当たることも多かろうし、不審がられることもありましょう。その渦中にいただけに、書きづらい点も多くありました。本学内外を問わず、しばしば本研究センターを訪れる方もあろうし、まだ一度も足を運ばれたことのない人達も多いと思い、主として、本研究センターの「表情の変化」を見ていただきたく記述したつもりです。紙数の関係上、又執筆者の非力のため、この目的を十分果たすことが出来なかったが、その点を読み取って頂ければ幸いです。

本研究センター設置計画（立案時は核物理研究所）が立案されて約二十年になりますが、部局史を記述していて感じたことは、創設前の十年間は非常に長く、創設後の十年間は実に早いということです。それは焦燥の時代と建設及び研究のために多くの人達が一体となって骨身を惜まず努力した時代の差でありましょう。全国共同利用施設として、共同利用実験が行なわれ、着々研究成果が生まれていますが、創設十年で、本研究センターは又一つ新しい転機にさしかかっています。本研究センターの今後の十年間がより充実したものになる様努力したいものです。

最後に、部局史をまとめるに当たり、協力して下さった事務部をはじめ、多くの人達に感謝の意を表します。

保健管理センター

白石純三

大阪大学保健管理センター史の編集に関しては、その設置が昭和四十四年四月と歴史も浅いために、現職教官の記憶に留まっている部分が多く、比較的容易であったといえる。

また大阪大学保健管理センター年報創刊号（昭和四十六年七月発行）には、それ迄の学生保健室時代についての座談会「私の学生保健室時代を語る」〔出席者・河盛勇造（元医学部第三内科助教授）、志村達夫（元医学部第三内科助教授）、村上五郎（元学生部次長）、郡軍二（元学生部厚生課長）、松下弁二（元学生部厚生課長）、司会・伊藤文雄（当センター所長）〕が輯録されており、精神衛生に関しても同年報同号に「大阪大学における精神衛生管理について」〔白石純三〕と題した研究報告の中で簡単に大阪大学における学生の精神衛生管理の歴史について触れてあったものが参考となった。

なお、近い将来に当センターは健康体育部の一部門として発展的解消を遂げる運命にあるが、その経過については教養部保健体育系の項で触れられると思うので割愛した。

理学部

芝哲夫

理学部部局史編集に当たっては当初音在清輝教授が委員長となり、各学科選出の委員によって部局史編集委員会を設置された。委員は数学科　永尾汎、物理学科　伊達宗行、化学科　千原秀昭、生物学科　松原央、高分子学科

野桜俊一各教授であった。これに全学の五十年史編集委員　芝哲夫、および写真史編集委員　田所宏行教授が参加して昭和五十四年十二月より六回の編集委員会を開いて本年三月その編集を終えることができた。

この間昭和五十五年四月には委員長の音在教授が理学部長に就任したので、芝教授が委員長に交替した。

編集方針および目次は音在委員長が作製し、大体その線に沿って執筆分担を行なった。原則として各学科とも講座および実験施設ごとに執筆を担当し、平均二百字詰原稿用紙四～五枚程度にまとめることになった。したがって昭和六年開学当時より続いている講座はその叙述の簡略化に苦労した。数学科のみは他学科と事情を異にするために、講座別とせずに四系統にまとめて執筆した。

特に創設時の記録で文書に残るものが少なかったので、数学科においては清水辰次郎先生に来学を願い、また南雲道夫名誉教授を訪問して談話を聴取した。物理学科では浅田常三郎名誉教授所蔵の写真類など多くの資料を見ることができた。化学科においては全名誉教授の会合を持って創設時の談話を聞くとともに、別に仁田勇名誉教授からは第三期理学部長として新制度移行時に経験された苦心談を聞いた。またサントリー中央研究所所蔵の小竹無二雄名誉教授遺品中より貴重な写真類などの提供を受けた。また理学部創設時の功労者木間瀬策三氏の嗣子棠三氏より大阪帝国大学昇格に伴なう理学部創設運動における人脈につながる裏話を聞いた。

これらの談話にはいずれも貴重な事実を含んでいて、その主要なものは総記または各学科の該当箇所に記載されたが、なおいささか記録に止め難い秘話もあった。この機会にこのような裏面史も何等かの形で残すことも意義あることと思われる。

超高圧電子顕微鏡センター

藤田広志

今回当センターの紹介を担当しましたが、この機会に初期の趣旨とか目的が現在どの程度満足され、またはどのように発展したかについて一考できたのは、一つの区切りとして有意義だったと考えます。日頃は目的達成のために唯夢中で進んでいる関係上、このように過去を振返る機会もなく、一方では十年後、更に未来の事となると仲々考える余裕がありません。その意味では、今回のような部局史で、各部局の沿革を当初の趣旨とか構想との関係で種々の角度から眺めることができれば、より阪大の特徴が浮彫りされるであろうと思います。さらに、今回別途に公募された〝一〇〇年後の阪大〟のような、各々異なったスケールでの阪大の将来像を併記することが出来れば、五十年史時点での阪大人の構想とともに何を考えて行動していたかを将来に伝えることにもなります。五十年史が単なる回顧録でなく、阪大の将来に重点をおいた飛躍への踏台となるためには、一〇〇年後の夢を高らかに謳い上げたものであって欲しいと思います。

編集室所蔵資料・図書目録（一九八一・二）

〈大阪大学関係〉

大阪帝国大学一覧　昭和六年～一二年度、一八年度
大阪大学一覧　昭和二八年度、三二～五五年度
大阪帝国大学創立史　昭和一〇年刊　西尾幾治編集
大阪大学二十五年誌　昭和三一年刊
大阪大学職員名簿　昭和二七年、二九年～四四、四六～五四年
大阪大学工学部七十五年史
大阪大学工学部溶接工学科創設三十年誌
大阪大学工業会（工業クラブ雑誌）
大阪大学看護教育七十年史
大阪大学助産婦教育百年史
大阪大学医学伝習百年史　微生物病研究所
大阪大学医学伝習百年史　基礎講座研究施設
大阪大学医学伝習百年史　臨床講座・診療部門
大阪大学医学伝習百年史年表
大阪大学医学部学友会名簿
大阪大学医学部学友会五十年史
大阪大学歯学部十周年記念誌
大阪大学経済学部創設二十五年年表
大阪大学経済学部同窓会名簿
大阪大学経済学部十年の歩み
大阪大学水泳部五十年史
大阪大学卒業記念アルバム一九七八、一九七九
大阪大学計算機センター十年誌
基礎工学部の歩み　第一～第一〇号
大阪大学保健管理センター創設十周年記念誌
大阪大学薬学部紀要　第五号
青雲会・会員名簿五一年度（阪大法学部同窓会）
いちょう祭展示会・展示目録及解説
竹尾結核研究所開所六十年記念
大阪大学新聞（会）再編集版
大阪高等工業学校一覧　第一集～第七集　明治三〇年度～昭和三年度（複写、原本は工学部所蔵）
大阪工業大学一覧、附要覧(一)、(二)昭和四、五、六年度（複写、原本は工学部所蔵）
大阪医科大学一覧（大学・病院・予科）　大正一三、（複写、原本は医学部所蔵）
浪速高等学校一覧　昭和三～昭和四、（第三年度）
浪高五十年　旧制浪速高等学校五十周年記念誌
公孫樹クラブ七十周年記念誌（阪大テニス部）
旧制大阪高等学校同窓会報
塩見理化学研究所要覧　大正一五年、昭和六年
大高　それ青春の三春秋
紅顔五千　旧制大阪高等学校
人間・大高の森
大高寮歌集

〈伝記・記念誌〉

緒方洪庵伝
緒方惟準先生　一夕話
正田建次郎先生　エッセイと思い出
青雲―釜洞醇太郎遺文集―
紅萠ゆる丘の花　三高写真集
千里―芝茂退官記念文集―
故正田建次郎先生追悼講演会講演集
長岡半太郎伝
正田貞一郎
岡橋林氏追懐録
関桂三氏追懐録
宮島清次郎翁伝
久保田豊
事務局長のつぶやき　吉田勇
岡野豪夫追悼録
松本順自伝・長与専斎自伝
友垣―若槻哲雄先生退官記念―
小野塚喜平次―人と業績―
佐多愛彦先生伝
佐多愛彦先生論文集

〈大学・高等学校年史関係〉

東京大学の百年　写真集　一八七七～一九七七
東京大学教養学部の三十年
東京大学史紀要　第一号、第二号
九州大学五十年史　通史
九州大学五十年史　学術史　上巻、下巻
九州大学医学部七十五年史
静岡大学二十五年史
広島大学二十五年史　通史
広島大学二十五年史　包括校史
広島大学二十五年史　部局史
京都大学七十年史
京都大学創立七十周年記念事業報告書
東北大学五十年史　上
東北大学五十年史　下
北海道大学百年史
写真集　北大百年
北大百年史　部局史
北大百年史編集ニュース第一号～一〇号
関西大学七十年史

関西大学史紀要　第一号
関西大学史紀要　第二号
関西大学史紀要　第三号
関西大学　GUIDE '76
同志社社史史料編集所文書分類表（未定稿）
同志社年表（未定稿）
同志社時報　No. 68/1980
同志社百年史　通史編　一
同志社百年史　通史編　二
同志社百年史　資料編　一
同志社百年史　資料編　二
新潟大学医学部五十年史
新潟大学二十五年史
神戸女学院百年史
北海道教育大学開学三十年
千葉大学三十年史
早稲田大学百年史　第一巻
大阪女子大学五十年史
東京医科歯科大学創立五十年記念誌
東京教育大学百年史
山梨学院大学三十年史
奈良女子大学六十年史
東京商船大学百年史
神戸商科大学五十年史
宮城教育大学十年史　資料集　上
宮城教育大学十年史　資料集　下
明治学院百年史
武蔵工業大学五十年史
弘前大学二十年史
岡山大学二十年史
岡山大学史　昭和四四年～昭和五四年
西南学院五十八年のあゆみ
玉川学園五十年史　写真編
玉川学園創立五十年記念論文集（玉川大学）Ⅰ
玉川学園創立五十年記念論文集（玉川大学）Ⅱ
玉川学園五十年史
大阪市立大学の百年　写真集　一八八〇～一九八〇
熊本大学三十年史
法政大学の百年　一八八〇―一九八〇　小史
高知大学の三十年
東京慈恵会医科大学百年史
鹿児島大学三十年史
第三高等学校資料　一～三七（マイクロ複写、製本）
証言四五（神戸女子薬科大学創立四十五周年記念）
谷岡学園五十年史
日本大学の九十年
京都教育大学開学三十周年記念誌
大島商船高等専門学校紀要　第一三号（昭和五五年三月）
酪農学園史
神陵史（三高史）
稿本神陵史（第一巻～五巻）（複写製本）
旧制高等学校史研究　一～二〇号（三分冊）

〈寄贈資料〉
大阪帝国大学創立経歴
（昭和六年五月前後の新聞切り抜き集）
昭和五四年一一月　安井武司氏より寄贈

編集室日誌より

昭和五四年三月　大阪大学五十年史編集実行委員会を組織する。委員長・医学部教授中馬一郎
五月　五十年史写真小委員会を組織する。委員長・工学部教授三谷裕康
七月　五十年史資料編集室設置（附属図書館三階）・室員、松田武・大西愛着任
実行委員会幹事会開催（於・国際交流会館）
部局史執筆要領案、目次案作成（～八月）
年表作成開始（～一〇月）
名誉教授への資料依頼状作成
写真小委員会開催（於・編集室、このちち昭和五五年三月まで四回開催）
八月　幹事会開催（於・編集室）
教養部五〇メートルプール開き写真撮影
執筆要領追加案作成
書棚入荷
通史の目次案について他大学の目次案検討
言語文化部竣工式の写真撮影
九月　幹事会開催（於・中之島、のちほぼ月に一回開催）
略年表試案作成

資料カード検討、案作成
一〇月　同志社大学社史史料編集所へ調査
適塾展準備会（第二回　於・中之島本部応接室）
一一月　大学組織変遷年表作成
適塾展準備会（第三回）に臨席
実行委員会開催（於・待兼山会館）
文学部名誉教授座談会・名誉教授懇談会に出席、聞きとり調査
東大百年史編集室、国立公文書館、大学基準協会へ調査（中馬、梅溪、松田、大西）
産業科学研究所記念祭（座談会）出席、聞きとり調査
一二月　中之島の本部にて資料調査（評議会記録・庶務資料）
読売新聞資料部調査（関係記事の複写　～二月）
教養部・言語文化部名誉教授座談会、聞きとり調査
適塾展・準備会（第二回）
部局史目次作成作業
昭和五五年一月　京都大学・三高会館へ資料調査
部局史執筆要領完成、印刷
部局史・写真連絡会議
評議会記録調査下調べ（於・中之島）
二月　実行委員会（於・待兼山会館）
名誉教授宮本又次氏・藤野恒三郎氏座談会（於・待兼山会館）
三月　学生三名写真撮影および写真資料整理（～一週間）
ロッカー五台、書棚二連一台搬入
兵庫県山崎町西村家文書（適塾へ寄贈のもの）整理・目録作成
「大阪大学五十年史編集大綱」送付
四月　写真集小委員長・教授三谷裕康退官のため、工学部教授堀川明が小委員長となる。
写真小委員会開催（こののち昭和五十六年一月まで月一回の割合で開催、その後三月末、編集終了まで随時開催した）
略年表作成（～六月）
五月　適塾竣工記念式典（十九日）同日舎密局跡・大福寺など撮影
大阪三越にて適塾展はじまり（六月七日まで）写真撮影と見学に行く
六月　資料保管室を設置（附属図書館三階）
五十年史紀要発行について検討
実行委員会開催
写真集写真割りつけ作業（～二月まで一九回）
机搬入、室内移動資料室整理
室員・大谷文子着任
七月　毎日新聞社へ資料調査
部局史編集委員長連絡会開催
評議会記録調査
八月　学生部建物（豊中A棟）とりこわしの写真撮影
写真集印刷業者依頼
本部事務局の吹田への移転、調査、撮影
朝日新聞社へ写真調査
九月　毎日新聞社保存の阪大関係新聞切り抜きを撮影（於・毎日新聞社）
紀要原案を作る
体育会・新聞会（大阪大学）へ写真収集依頼
医学部内の資料調査（医学部附属病院庶務掛で古い時代の資料撮影、施設掛で話を聞く）
一〇月　東京国立公文書館へ資料調査（松田、大西）
文部省へ資料調査（水野・大谷）
国立公文書館のマイクロ写真整理
実行委員会
一一月　写真集目次案作成
市立図書館へ資料調査
工学部名誉教授座談会
朝日放送にて飯島幡司氏に聞き取り調査（梅溪、松田、大西）
紀要執筆依頼状発送
元大阪高等工業学校教官木村源三郎宅で高等工業学校時代の写真複写
大阪市立図書館で資料複写
写真集の刷り見本出来上り
宮本又次氏宅へ写真資料調査
部局史原稿しめ切り日

一二月　府立図書館へ写真複写
文法経の授業風景等の撮影
写真集全体の問題点総検討
写真集割りつけ第一回展示（於・附属図書館大会議室）
旧理学部校舎探訪・調査
大阪府立図書館へ資料調査
国立公文書館資料調査（熊谷、松田）
部局史原稿未提出部局に提出督促、執筆状況を聞く
写真集割りつけ第二回展示（於・附属図書館小会議室）
写真集割りつけ第三回展示（於・小会議室、割りつけ展示完了）
こののち写真集校正はじまり三月末校了

昭和五六年一月　実行委員会
紀要創刊号印刷発注

二月

編集後記

◇大阪大学は本年五月一日をもって五十周年を迎える。

大阪帝国大学創設案が議会にかけられたのは、昭和五年十二月開会の第五十九帝国議会であった。

地元政財界の強力な設立運動をバックに大阪帝国大学創設を企画したのは、浜口雄幸立憲民政党総裁のもとで文相の地位にあった、地元選出の田中隆三である。

大阪帝大の生みの親といわれる柴田善三郎大阪府知事の設立主意は、工業中心地たる大阪に理化学の基礎的研究をなす理科大学をまず必要とし、これに医科大学を加えるというものであった。これには昭和恐慌以来の不況脱出の願いが托されていた。

昭和六年三月二十五日貴族院を通過し、五月一日長岡半太郎総長をむかえて大阪帝国大学は発足した。

◇紀要創刊にあたり、山村雄一総長から創立五十周年の辞、および本紀要題字の揮毫をいただき、創刊号を飾ることができた。

◇本紀要は委員長の冒頭言にある趣旨で発刊が企画されたが、創刊号のことであり、時間的に余裕がなく、執筆各位には大変なご無理を強いることになった。本号は前史ともいえる幕末明治期に論考が集中したが、日頃暖められたテーマであるだけに、多くの事実の発掘と同時に、新しい視角にみちた作品で創刊号を飾ることができたことは編集子として感謝の言葉もない。

◇本紀要は年二回の刊行を予定し、大阪大学史を広い視野から、多くの人びとによって記述されることを目指している。各位のご協力をえて充実した紀要に作り上げたいと希望している。

◇本紀要の編集委員は次の各氏。

中馬一郎（委員長、医学部）、梅溪昇（文学部）、熊谷開作（法学部）、作道洋太郎（経済学部）、芝哲夫（理学部）、堀川明（工学部）、水野克彦（教養部）、原田篤也（産業科学研究所）

編集室は松田武、大西愛、塚本文子の三人で担当している。ご連絡は編集室におよせ下さい。

（松田　武）

大阪大学史紀要　第一号

昭和五十六年五月一日　発行

編集　大阪大学五十年史資料・編集室
発行　〒560　豊中市待兼山町一―一
大阪大学附属図書館内
電話〇六（八四四）一一五一
内線　二一〇一・二一〇五

印刷　河北印刷株式会社
〒601　京都市南区唐橋門脇町二八
電話　〇七五（六九一）五一二一